

カキ「刀根早生」の環状はく皮による結実安定法

農業研究センター 果樹研究所 落葉果樹部

研究のねらい

刀根早生は、若木時代に樹勢が強過ぎて生理落果が多く、収量の低い園が多い。そこで、この問題を解消するための環状はく皮の処理時期、方法及び回数について検討した。

研究の成果

1. 処理時期については、結実が全般的に悪い年(例、平成3年産)は、生理落果が多くなる直前の満開後20日目頃が最も効果が高かった。
2. 結実が全般的に良い年(例、平成4年産)は、処理効果がほとんど見られず、いずれの試験区においても着果は十分であった。
3. 処理方法については、地上10～30cm程度の主幹部の幅約3mmの全周処理が最も効果が高く、その後の癒合も良かった。
4. 処理回数については、1回、2回処理の明確な差は認められなかったが、年2回行くと樹勢を弱め過ぎる傾向があるので、原則として年1回とする。なお、前年まで結実が安定し、枝梢が充実している樹については、原則として行わない。
5. 平成4年産の結実が良かった理由として、例年生理落果(ジューンドロップ)が多い梅雨期に雨が少なく、新梢の二次伸長もほとんどなく、幼果への養分供給が十分行われたためと考えられる。
6. よって、環状はく皮を行うかどうかは、再発芽の状態を観察し、二次伸長が旺盛に行われるようなら、すぐに処理を開始する。また、それでも伸長が止まらなければ摘心を行う。
7. 樹勢にはせん定と施肥の程度がかなり影響してくるので、樹勢が強過ぎる場合は、せん定を軽くし、元肥の量を基準の半分程度に抑えておく。
8. その他に、結実を左右する要因としては、晩霜害があるので、発芽期の早い刀根早生においては、特に晩霜対策も十分行っておく必要がある。

表 1 平成 3 年産の着果率 (%) の推移

処 理 日	処理方法	5月29日	6月 7日	6月28日	7月17日
5月17日	A	62	49	27	21
	B	41	29	13	10
	X	60	49	36	18
6月 7日	A	61	52	44	44
	B	60	50	24	19
	X	35	18	14	15
6月28日	A	40	27	10	10
	B	48	35	12	12
	X	58	48	14	13
無 処 理		71	57	17	8

注) A 地上10～30cmのところの幅3mmの主幹全周処理

B 同じく幅10mmの主幹半周処理(4分の1ずつ)

X 幅3mmの種枝及びその上の主幹部全周処理 各区とも2樹の平均値(満開日:5月15日)

表 2 平成 4 年産の着果率 (%) の推移

処理日(月/日)	処理幅	6/ 1	6/11	6/20	7/ 1	7/11	7/17
5/1	3mm	99	94	94	94	86	86
5/11	3mm	99	97	96	95	86	85
5/11	6mm	100	99	99	97	91	91
5/21	3mm	95	93	93	92	90	90
5/21	6mm	100	97	95	90	87	85
6/1	3mm	99	99	99	96	91	90
6/11	3mm	96	87	66	65	62	62
5/11、6/1	3mm	99	92	87	80	79	77
5/11、6/11	3mm	100	99	98	94	93	91
無処理		100	97	96	95	91	91

注) 地上10～30cmのところの主幹部を全周処理した。(1区1樹2反復)

着果率は、5月21日を100として算出した。

この年は、前年の落葉病と台風による早期落葉のため、貯蔵養分不足と考えられる、開花後10日目までの生理落葉が多く、樹による結実率のばらつきが見られたが、全般的に結実が安定していたために着果不足になる樹はなかった。(満開日:5月10日)